

山村農人の教養
～降矢静夫 20 世紀末の山里暮らし～

木俣美樹男

The Culture of an Honest Farmer, Shizuo Furuya at the Rural Life in the End of 20th Century

Mikio KIMATA, Plants and People Museum

人生恨むなかれ 人知るなきを
幽谷深山 華自ずから紅なり
(三浦梅園)

はじめに

降矢静夫に初めて会ったのは 1975 年 10 月 4 日であった。彼が 65 歳の頃で、当時の私とは 40 歳ほどの違いであった。この日以来、彼が 92 歳余（2003 年）で逝去されるまで、27 年間にわたり、山村における農耕についてたくさんのことを教えていただいた。彼は最後の山村農人の一人として誇り高く、晴耕雨読の教養人としても、とても敬愛できる方だった。そこで、私は深く教えを受けるにしたがって、この山村農人の後継ぎになろうと心に決めた。

大学に学生・院生として、教職員、および研究員として人生の 50 年以上を過ごしてきた。大学で学びを深めようとしていながら、教養とは何かについて疑問を持ち続けてきた。大方の人々は学歴が高ければ、知識や情報の数量を多く有していると思い、すなわち教養があると理解しているのだろう。しかし、私は国内外の多くの大学・研究所を異なる立場から見てきて、さらに農村調査によって多くの方々に会い、教養とは何かについて再考することにした。とりあえず、教養とは人々や事物を想い遣ることと定義し、言い換えれば、豊かな知識に基づく直観のことだと認知した。学校教育制度による学歴は知識を増やし、教養を高め

ることに大いに役立つとは思いますが、一方で、この学歴が劣等感・優越感に關与して虚無や傲慢に至り、むしろ思い遣りを欠き、教養の向上を阻害することも度重ねて見てきた。

はっきり言えば、学校教育制度の学歴が教養の邪魔であることがあり、こうした学歴がなくても、自ら学びを深めれば教養は高められることを実在の人物で知ったのだ。教養を裏打ちする学問は自分個人ですることだが、しかしながら、終生の師や良い先達を得なければ、学問は向上、深化しないとも考えるに至った。

本論で分析対象とする山村農人こそはそのもっともよい事例で、私は山村農人降矢静夫から多くを学んだ。彼は末子故に農家を継ぎ、学校教育制度の学歴を重ねることは無かった。実兄は法曹関係者であったようだから、彼も農家を継ぎ、病弱でありながら徴兵役に着くという時代的境遇になれば、いわゆる高学歴を得ることはできただろう。病弱であったために乙種で徴兵されて硫黄島などに行かされたほかは、彼はほとんど西原村から出なかった。この山村農人をインタビューに訪れた誰かがありきたりにも、彼の学校教育歴の無いことを卑下したことがあり、彼は悔しい思いをしたことがあったようだ。しかし、いわゆる学

校教育歴で真の学習履歴や教養が評価できるものではない。自らの修練で学問することこそが真の意味での学習履歴であり、高い教養が培われるというものだ。すなわち、彼の教養こそはとても高く、私は彼に師事し、自宅に30年近く通って、親しく独立自尊の教えを受けてきた。私の人生は世間に波風立てて過ごしてきたので、心が負傷することも多く、現在も変わることなく、農人から励ましを受けていると、私は有難く感じている。

農人降矢との対話を、若気の至りで、本としてまとめたいと言って、磁気テープによる記録を認めていただいたのに、忙しさにかまけて疎かにし、いいわけながら出版の機会にも恵まれなかった。これを見かねた考古学者の安孫子昭二が手紙の整理をかつて出してくださり、降矢と親交のあったほかの2名宛も含めて、手紙・葉書から、詩歌などを抜き出して、出来上がったのが降矢静夫句集『雪虫』(1998)だった。なお、句集『雪虫』は残部がないので、校正し改訂版を電子出版し、植物と人々の博物館ホームページに掲載してある。

その後さらに、安孫子昭二が多用の中でも聞き取りのテープ起こしを続けてくださった。横着な私は先輩にこのような大変な仕事を押し付けてしまい、ほんとうに申し訳なく思っているので、残りの録音テープは自分で文章化することにした。降矢に約した出版の機会にはいまだに恵まれないので、電子出版として最後の山村農人の暮らしを記録しておく。約300通の葉書・手紙、約20巻の磁気テープに基づき、本論において降矢の暮らしの人生哲学を考察した。

本論は心の構造と機能に関する三部作の第一論考である。山村で自然に寄り添って暮らしてきた農人降矢個人の心の在りようを、当人が自ら書き記した書簡、自ら語った録音記録から、稀有な直接経験の事例と

して、現代においても統合され得る心のありようを明示したい。

なお、第二論考(文福洞 2021)はムラ社会における心の構造と機能に関して、私たちの40年余りにわたる直接体験に基づき分析、論考する。第一論考(本論)および第二論考に理論的仮設として第三論考(黍稷 2020)ではより普遍的な理論として

「心の構造と機能の統合」を先だって構築し、これを第二および第三論考に適用することにした。また、論考の客観性や公正性を担保するために、主な分析の手法はテキスト分析を用い、原則として失礼ながら敬称は略した。

1. 手紙類データベースのテキスト分析

降矢静夫との交流は1975年から始まって、彼がひっそり他界された2003年初めまで30年近くにわたって続いた。この間にいただいた手紙・葉書は、一部は紛失した様だが、家族あても含めて約300通であった。現存する278通の文面を年代順にワードおよびエクセルに入力した。これらの文章をSPSSテキスト分析で解析してみた。この操作によって、彼の関心や思いがどこにあったのか、どのような自然観、人生観をもっていたのか、を探ってみた。なお、ワード版は個人情報保護の部分を削除して、下記サイトに公開した。

注：手紙類データベースのサイト；
www.milletimplic.net/forestvil/furuyaletters.pdf

1) 感性分析及び係り受け分析のカテゴリ

感性分析の結果を表1に示した。これらの抽出されたカテゴリにおいて、自然観に関する主なカテゴリは雨、雪、山、日、気である。農耕に関する主なカテゴリは雑穀、作、種、農であり、人生観に関する主なカテゴリは老、家、人、生である。これらのカテゴリはディスクリプタもレコード数も多い。

主なカテゴリに含まれる語彙の詳細については、後に表4、表5および表6に示して、さらに検討する。

係り受け分析の結果を表2に示した。ここでは、感性分析で抽出された主なカテゴリについてのみ検討する。雨のサブ・カテゴリの、レコード数が多い主なものは、雨+<>、雨期+、梅雨+、動詞+雨、雨+幸、および形容詞+雨、であった。同じく、山については、山+、山村+、動詞+山、動詞+山村、および山+形容詞であった。農については、農+<>、農+事、動詞+農であった。雑穀のサブ・カテゴリの、レコード数が多い主なものは、雑穀+<>、動詞+雑穀、

および雑穀+私であった。種(たね)については、種+<>、動詞+種、種+稗であった。

感性分析のタイプとコンセプトパターン、および係り受け分析のコンセプトを表3に示した。感性分析のタイプにおいて、良い内容の主な事項は、感謝78、喜び全般62、快い56、嬉しい54、満足47、楽しい43、期待29、幸運22、安心22、褒め・賞賛21、などであった。悪いの内容の主な事項は、不満82、不快54、体が悪い状態47、悲しみ全般43、困っている38、残念36、謝罪28、不運27、などであった。

表1. 感性分析のカテゴリ

カテゴリ	主な語彙(名詞)	感性分析	
		ディスクリプタ	レコード数
地	地方、地上、 土地	40	61
月	五月、四月、九月、一月、十月、七月、正月、三月、八月、二月、六月、半月	23	163
雨	雨量、 梅雨 、長雨、小雨、 雨期	51	111
雑穀	雑穀類、雑穀作り、 雑穀研究	41	100
雪	根雪、積雪、雪虫	36	74
老	老化、老齡	14	48
春	迎春、立春	34	80
山	山村 、山地	58	102
日	日向 、一日、 十日 、二日、 日曜 、五日、来日、短日、六日、七日、 先日 、 三日 、半日、 今日 、翌日、過日、日陰、雨日、 本日 、 日照 、 毎日 、 日中 、 昨日	158	211
秋	昨秋、 晩秋 、初秋蚕	28	83
年	来年 、一年、 年齢 、 三年 、 今年 、 越年 、 二年 、毎年、年頭、 拝年 、 本年 、 平年 、 昨年 、 例年	108	207
家	家居、家族、家庭、研究家	30	58
作	不作、作ったもの、 作物 、 試作 、 豊作 、畑作	44	110
本		20	34
間	時間 、一週間	36	63
種	種子	43	73
もの		43	42
長	長寿、長女	24	28
半		15	21
人	一人、三人、 二人 、 老人 、 農人 、 友人 、 縄文人 、知人、 人間	81	129
生	生育、生涯、余生、 老生 、 生活 、 自生 、 早生 、 先生 、 晩生 、 学生 、	52	97
農	山村農 、 農友 、 農業 、 農家 、 農耕	54	88
期	期待、 時期 、 収穫期	32	61
気	元氣 、 気象 、 気候 、 天気 、 気温	30	90

感性分析のコンセプトパターンにおいて、自然観に関する主なカテゴリに沿う語彙は、雨 85、光 83、雪 66、秋 59、夏 55、山 48 が多かった。農耕に関するカテゴリに沿う語彙は、作る 99、雑穀 85、畑 52、キビ 44、種 42、収穫 41、ソバ 37、シコクビエ 37、作物 37、粟 37、試作 35、食べる 35 が多かった。人生観に関するカテゴリに沿う語彙は、私 151、思う 85、祈る 74、礼 59、忙しい 58、老人 50、暇 48、健闘 48、時代 46、仕事 44、多忙 43、知る 43、子供 40、皆さん 39、元気 36、戴く 33 が多かった。

係り受け分析のコンセプトにおいてもお

およそ類似した傾向が示された。自然観に関する主なカテゴリに沿う語彙は、雨 85、光る 86、雪 69、秋 61、夏 56、春 56、山 48 が多かった。農耕に関するカテゴリに沿う語彙は、作る 108、雑穀 86、畑 54、キビ 44、種 42、収穫する 45、作物 38、ソバ 37、シコクビエ 37、粟 37、食べる 36、試作する 35、が多かった。人生観に関するカテゴリに沿う語彙は、私 152、思う 86、祈る 74、暇だ 74、忙しい 73、礼する 61、老人 50、健闘 48、時代 46、仕事 47、多忙だ 43、知る 50、子ども 40、皆さん 39、元気だ 47、が多かった。

表2. 係り受け分析のカテゴリ

カテゴリ	係り受け分析	
	ディスクリプタ	レコード数
雑穀	54	100
雑穀 + <>	28	88
動詞 + 雑穀	11	46
雑穀 + 私	5	30
人	187	138
人 + <>	58	101
老人 + <>	5	44
友人 + <>	3	14
農人 + <>	2	15
動詞 + 人	54	77
動詞 + 老人	4	20
動詞 + 友人	3	12
山	96	120
山 + <>	41	96
山村 + <>	6	26
動詞 + 山	24	63
動詞 + 山村	3	20
山 + 形容詞	5	10
農	73	81
農 + <>	27	58
農 + 事	17	30
動詞 + 農	17	43
雨	91	119
雨 + <>	31	98
雨期 +		10
梅雨 +	7	13
動詞 + 雨	25	78
雨 + 幸	17	35
形容詞 + 雨	9	20
種	66	71
種 + <>	25	40
動詞 + 種	20	41
種 + 稗	16	39

表3. テキスト分析による語彙のタイプ、コンセプト・パターンおよびコンセプト

FtoZ手紙 n=278				
タイプ(感性分析)		コンセプトパターン(感性分析)	コンセプト(係り受け分析)	
悪いー悪い	214	ある	ある	171
良いー良い	145	くる	私	152
悪いー不満	82	私	なる	149
その他ー要望	80	なる	する	139
良いー感謝	78	せう	くる	131
良いー喜び全般	62	存じる	せう	122
良いー快い	56	作る	存じる	111
良いー嬉しい	54	又	作る	108
悪いー不快	52	雑穀	又	96
悪いー体が悪い状態	47	雨	光る、思う、雑穀	86
良いー満足	47	思う	雨	85
その他ー疑問	44	光	申し上げる、西原	79
良いー楽しい	43	西原	本年	76
悪いー悲しみ全般	43	申し上げる	敬具、日	75
その他ー問い合わせ	41	本年	祈る、暇だ	74
悪いー困っている	38	祈る	忙しい	73
悪いー残念	36	敬具	雪	69
良いー期待	29	日	ない、いづれ	63
悪いー謝罪	28	雪	礼する、秋	61
悪いー不運	28	いづれ、ない	まだ	60
悪いー不安	27	まだ	出掛ける、由	58
その他ー激励	26	礼、秋	送る	57
良いー幸運	22	忙しい	夏、春	56
良いー安心	22	由、出掛ける	年	55
その他ー驚き	21	夏、年、是	畑	54
良いー褒め・賞賛	21	送る	える、是	53
その他ーお願い	20	様子、える、畑	行く、様子	52
悪いー苦しい	17	老人	寒い、でる	51
悪いー淋しい	16	暇、健闘、山	知る、老人	50
良いー好き	15	行く	遅れる、山、健闘	48
悪いー悲しい	13	昨年、時代	早い、昨年、仕事、元気だ	47
その他ー提案・忠告	12	キビ、仕事	時代	46
良いー楽しみ全般	12	今日、多忙、いふ、知る、 ¹	収穫する	45
良いー体が良い状態	11	種、で	キビ	44
良いー感動	9	予定、収穫、入る、出来る	いふ、今日、多忙だ	43
好いー好評・人気	9	子供、へる	入る、種、予定する	42
良いー美味しい	8	皆さん、	出来る	41
悪いー批判	7	今年、ひる、多い	へる、子ども	40
悪いー恐怖	6	ソバ、シコクビエ、作物、粟	ひる、皆さん	39
その他ー勧誘	6	元気	多い、申す、食べる、今 年、今、作物	38
良いー祝福	6	試作、降る、食べる	やっど、粟、ソバ、シコクビ エ	37
悪いー諦め	4	いい、六月、かかる	折る、ます、降る、試作す る	35
良いー対応が早い。悪いー誹 謗・中傷、怒り、恨み、嫌い、後 悔、哀れみ、不味い。	2	ます、戴く	かかる、六月、いい	34
良いー幸福、買いたい、吉報、 笑い。悪いーショック、悩み、売 れていない、対応への不満、対 応が遅い、落胆。	1	以下省略	以下省略	

表2および表3に示した主要なカテゴリを構成する語彙を、自然観（表4）、農耕（表5）および人生観（表6）を基礎づける事象としてまとめた。また、これらのカテゴリに関わる語彙の関係を図1から図5にグリッドレイアウトで視覚化した。

自然観に関わる語彙を表4にまとめた。カテゴリ山に関わる主な語彙は、山、山村、自然、などであり、具体的な山岳名も

ある。カテゴリ雨に関わる主な語彙は雨期、梅雨などであるが、雨に関する多様な表現がある。カテゴリ気については、光、日、雪、夏、春などとても多く、季節の移ろいに強い関心が示されていた。植物は桜、桑、菊の他、40余種が認識されていた。動物も鶯、猿、郭公、雀の他、30余種が認識されていた。昆虫も蚕、蟬のほか、10種以上が認識されていた。

表4. 自然観に関わる語彙

自然に関わる事象	語彙
山120	山48、山村20、自然14、海拔4、山菜4、峠4、鶴峠4、山畑4、奥多摩4、山居4、奥山4、富士道者4、山々4、山仕事4、山伝4、山地4、山奥4、山村農人4、山桜4、山茶4、山葵田4、山里4、峠道4、秩父の山4、アンデス4、パミール4、奥日光4、奥秩父4、奥群馬4、関東山地3、山峡3、川3、狩人2、秋山郷2、アルプス1、ヒマラヤ2、奥千丈ヶ原1、奥地1、登山家1、白山山麓1、雲取1、奥秩父6、富士の道者1、富士山麓1、山外23、自然界3、自生3、以下省略
雨85	雨期12、梅雨9、雷雨1、細雨5、雨日5、雨量5、梅雨明け4、長雨4、入梅3、小雨3、晴耕雨読3、大雷雨2、秋雨2、空梅雨2、雨衣2、霧雨2、ソバ長雨1、冷雨1、小雨小閑1、小雨後、時雨1、梅雨期1、梅雨末期1、梅雨空1、俄雨1、荒梅雨1、萩雨1、豪雨1、長梅雨1、雨中1、雨台風1、雨土、雨天1、雨春眠1、雨止1、雨続き1、雨蛙1、雨読の方1、雨間急ぎ1、風雨1、雨けふる1、高温空梅雨中、さみだれ1、以下省略
気90	光83、日73、雪66、秋59、夏55、春55、降る35、寒30、冬28、天候25、寒さ24、時期23、低温22、日向22、暑19、水19、高温19、霜18、暖冬17、風16、台風15、不順14、晩秋13、天気12、日中12、暑さ12、寒い12、寒い12、残暑11、気象11、暑い11、コタツ10、気候10、短日9、冬ごもり8、寒中8、小雪8、気8、猛暑8、異常気象8、凍る8、季節7、晩霜7、積雪7、紅葉7、乾燥6、冷害6、初冬6、日陰6、冷夏6、寒波6、晴天5、根雪5、気配5、盛夏5、乾5、日照不足5、夕立4、日照4、梅雨明け4、気温4、満開4、立春4、霧4、大雪4、余寒4、入梅4、曇天4、残寒4、露4、強風4、日ざし4、日当たり4、春一番4、春雪4、晩春4、暁4、曇り4、真夏4、空梅雨4、立夏4、小春日2、旱魃1、以下省略
植物	桜17、桑6、菊6、つつじ6、山茶花4、杉4、紅梅4、楓3、竹3、さくら2、ハイ松2、がまざみ1、しめじ1、すすき1、松1、へちま1、まんさく1、エゾ山桜1、カタクリ1、カタクリ群生満開1、ハイ松1、ヒョウタン1、ボダイジュ1、マンネングサ1、ヤマボウシ1、ヨメナ1、子モチ草1、山百合1、山芋1、東京の桜1、東京のサクラ1、朝顔1、沈丁花1、白檀1、紅梅花1、紫陽花1、芝1、萩1、萩雨1、葵1、蒔1、藤の花1、栃餅1、山桜1、山百合他2、彼岸花1、桜他4、梅他2、朴1、檀1、山桑1、ヤシオ1、いたどり1、さつき1、櫨1、
動物	鶯9、猿5、郭公4、雀4、みそさざえ3、鶴鶴3、土竜3、時鳥3、犬3、猫3、熊2、燕2、狸2、白鳥2、野鼠2、馬2、鴨2、うぐいす1、つばくろ1、つばめ1、もぐら1、みそさざえ仕事1、みそさざえ早春1、法師蟬1、カジカ1、タヌキ1、狸狐1、白鼻心1、駒鳥1、鯉1、鳩1、鳶1、鶏鳴1、鶯声1、猪熊1、
昆虫	蚕31、蟬5、雪虫5、こおろぎ3、蜂2、蜻蛉2、ブヨ1、めまどい1、虻他2、蚊1、蚕他6、蜂1、蝶1、蟻1

農耕に関わる語彙は表5にまとめた。カテゴリ農に関する語彙は幅広く、仕事、収穫、試作、実、農人、発芽、など著しく多かった。中でもカテゴリ雑穀に関しては作

物としての雑穀への強い関心を示しており、個別雑穀について見ると、特にキビ、ソバ、シコクビエ、粟、稗、トウジンビエなどに興味を持っていたことが明らかであ

る。カテゴリ作物に関しては、水稻、トウモロコシ、馬鈴薯、柿などに関心が払われ

ていたほか、多様な作物品種の栽培に熱意を持っていたことが示されていた。

表5. 農耕に関わる語彙

農耕に関わる事象	語彙
農81	仕事44、収穫41、試作35、実28、農人20、発芽19、野菜19、南面17、出穂17、苗16、植える16、穂15、鉢15、採る15、蒔く15、咲く14、収量13、種子12、豊作12、凶作12、分譲11、農友10、働く10、不作9、百姓9、雑草9、咲き出す9、完熟8、播種8、生育8、田8、異常気象8、農耕8、鋤8、農協7、晩生7、焼畑7、苗床7、草7、乾燥6、初秋蚕6、日陰6、脱穀6、調べる6、一株6、七十五日6、出荷6、北面6、好成绩5、定植5、田植え5、機嫌、農家5、日照不足5、マルチ黒4、作柄4、労働力4、収穫期4、品種4、平年作4、採集4、斜面4、日照4、普通種4、水田4、畑作4、茶摘4、葉類4、落葉4、豊作型4、防除4、陸稲4、耕す4、草刈り4、乾柴3、乾柴刈3、刈取り3、大豊作3、植付3、田植え3、田舎3、移植3、移植栽培3、繭3、繭出荷3、苗代3、萌芽3、蚕上3、試作畑3、農業3、農繁期3、鉢植え3、雑木3、乾燥期2、害虫2、播種期2、離農1、晩生種2、以下省略
雑穀100	雑穀85、雑穀作り8、雑穀類6、雑穀研究大会4、雑穀研究3、雑穀食3、インドの雑穀2、雑穀界2、国際雑穀学会1、その他雑穀、雑穀権威者1、日本の雑穀1、特産物雑穀1、玄米雑穀、現雑穀、稲雑穀、雑穀シンポジウム1、雑穀中心1、雑穀他1、雑穀収穫終1、雑穀地帯1、雑穀本年1、雑穀栽培1、雑穀研究室1、雑穀研究界1、雑穀研究法、雑穀研究誌1、雑穀研究開催1、雑穀職1、雑穀農耕文化1、雑穀事情、稗飯2、雑穀作り8、雑穀研究会2、全国雑穀研究会2、以下省略
個別雑穀	キビ44、ソバ37、シコクビエ37、粟37、稗27、四国稗17、トウジンビエ16、ネパールのソバ、モロコシ7、穂もちろし7、キビ糲6、ネパールの蕎麦4、コンニャク4、穂モロコシ4、四国ビエ3、蜀黍3、もちろしトウジンビエ穂2、キビ粉、ソバ種、ネパールそば2、ネパールのそば2、宿根そば2、朝鮮ビエ2、粳黍2、黍粟2、黍糲2、黍飯2、そばシコクビエ1、もちろし1、エゾ稗1、キビウルチ1、キビ他5、コウボウビエ1、コウリヤン1、サドビエ1、シコクヒエ他6、チョウセンビエ1、トウジンビエ丈他6、ネパール(そば2、シコクビエ、トウモロコシ、四国稗、蕎麦)、ブータンのシコクビエ1、ホモロコシ1、学名シコクビエ1、方言ヒエノケイ1、春秋そば1、春秋ソバ1、稗がゆ1、粟畑1、粟黍1、糲キビ他2、黍他4、高知のシコクビエ研究家、
作物37	水稻27、トウモロコシ23、馬鈴薯16、柿12、梅12、里芋11、稲9、大根8、麦7、ジャガイモ6、さつまいも6、小豆5、小麦、白菜5、コンニャク4、南瓜4、山形の紅花4、京菜3、結球白菜3、赤米3、さつま苗2、さつま蒔2、わさび2、キャベツ2、クワイ2、乾柿2、南瓜胡瓜ナスマト2、漬菜2、紅花2、菜種つゆ2、野沢菜2、食用菊2、麦飯2、わさびや、い草1、からし菜1、ほし柿1、キュウリ種1、クワイ新葉1、コンニャク芋1、ジャガイモ作り1、ミカン1、人参1、初栗1、大小豆1、小麦穂1、新米1、早生食用菊1、桜んぼう1、清太薯1、玉葱1、玉蜀黍ハニーバンタム1、甘柿1、甘藷1、甘藷苗1、甲州トウモロコシ、白菜苗、白米、米麦1、紫蘇1、肥後栗、茶の木1、荳、荳ゴマ1、葱苗1、蕪1、麦類1、瓢1、花栗1、山椒1、

人生観に関わる語彙については表6にまとめた。カテゴリ人については、私、礼、老人、暇、健闘、時代など、多くの語彙が繰り返し使用されていた。カテゴリ家につい

ては、子供、食べる、生活、健やか、孫など、家族や来客の語彙が多かった。親しくしていた具体的人名は20余人が挙げられ、交友関係の広さが示されていた。

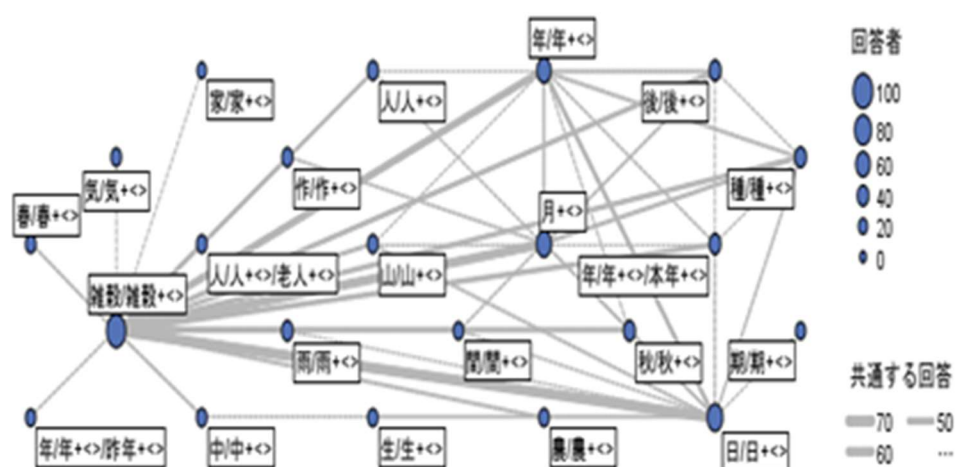
表 6. 人生観に関わる語彙

人生に関わる事象	語彙
人138	私151、存じる102、作る99、思う85、申し上げる78、祈る74、礼59、忙しい58、由57、出掛ける57、送る53、老人50、暇48、健闘48、行く47、時代46、多忙43、いふ43、知る43、予定41、入る41、出来る41、皆さん39、申す37、元気36、戴く33、御礼31、感じる29、推察26、願う26、皆々様25、都合24、無沙汰23、友人20、心20、自分20、老化19、運動19、判る19、尋ねる19、求める19、語る19、よろしく18、体調16、健康16、冬眠16、研究16、祈り16、生きる16、話15、お元気ですか13、有難く12、楽しむ12、不思議11、休息11、おどろきました11、人間9、生涯8、余生7、面談7、返信8、入来6、厚志6、参加6、有難う6、拝眉5、自分の事5、勉強4、孤独4、宿命4、希望4、感激4、生き残り4、生き甲斐4、紹介4、老齡4、若さ4、住む4、別れる4、生き残る4、許す4、疎遠4、以下省略
家27	子供40、食べる34、生活31、健やか30、子26、拙宅22、孫20、来宅11、盆11、帰宅10、留守10、家居9、在宅7、次男7、母7、嫁6、来訪6、ふるさと6、家庭5、家族5、来客5、老生5、誕生5、農家4、嬢4、次女4、独居4、親4、葬式4、一家3、他出3、夫婦3、奥さん3、客3、帰省3、父上3、老妻3、訪問3、倅2、倅夫婦2、娘2、子供の頃2、家の者2、扶養家族2、氏神2、祖先2、老夫婦2、育ての親2、親子2、末子2、二男1、良心1、主婦1、主婦家業1、亡妻1、出産1、吾子1、家業1、家督1、帰省中1、幼子1、弟1、愚妻1、祖母1、私夫婦1、良き家庭1、親類他4、賀客1、長女夫妻1、長男夫妻他3、隠居生活1
人名	安孫子18、木俣18、杣18、遥13、古守先生10、佐藤省三8、明峰7、研究家6、加曾利隆6、阪本先生6、佐藤5、安孫子昭二5、木俣教授5、金子5、シタラム先生4、知友4、小林央往4、知人4、陛下4、同級生4、知る人2、知人畏友2、篤志家2、笹村先生2、中川1、京都の友人1、先人1、友1、友人同志1、友人宅1、青山学院の名誉教授1、古家実2、安孫子先生他2、宮崎博1、小俣光雄1、小倉遊亀1、小林1、木俣先生1、田口洋美1、田村真知子1、番場友子1、石井鶴三1、笹村1、藤村新一1

図1に示した、感性分析によって抽出されたカテゴリ雑穀に関わるグリッドレイアウトでは、月・年・日とのつながりが認められ、季節が重要な関係を持っていることを示していた。図2に感性分析で抽出されたカテゴリ農をグリッドレイアウトで視覚化すると、やはり月・年・日・期など主に季節との関わりが明瞭で、また人や雑穀との関わりも示されていた。図3には、感性分析で抽出されたカテゴリ種（たね）に関し

て視覚化したが、矢張り季節とのつながり、次いで雑穀との関わりを示していた。

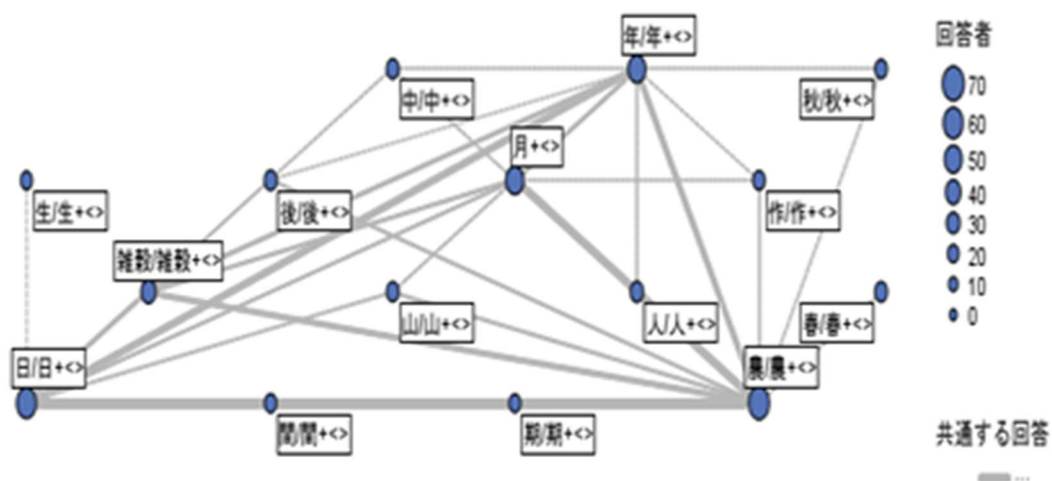
図4には、感性分析で抽出されたカテゴリ山に関して視覚化した。山についても季節との関わりおよび雑穀とのつながりが示されていた。図1との比較のため、係り受け分析でも抽出されたカテゴリ雑穀の視覚化（図5）を行ったが、感性分析と類似の傾向を示した。



感性分析:雑穀、グリッドレイアウト、21-67

3

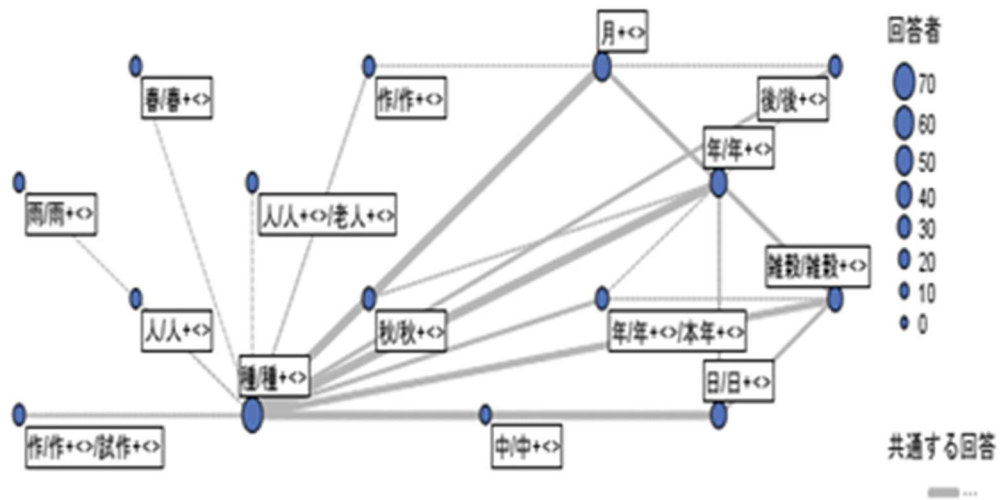
図 1. 感性分析の視覚化、カテゴリ雑穀



感性分析：農、グリッドレイアウト 17-44

3

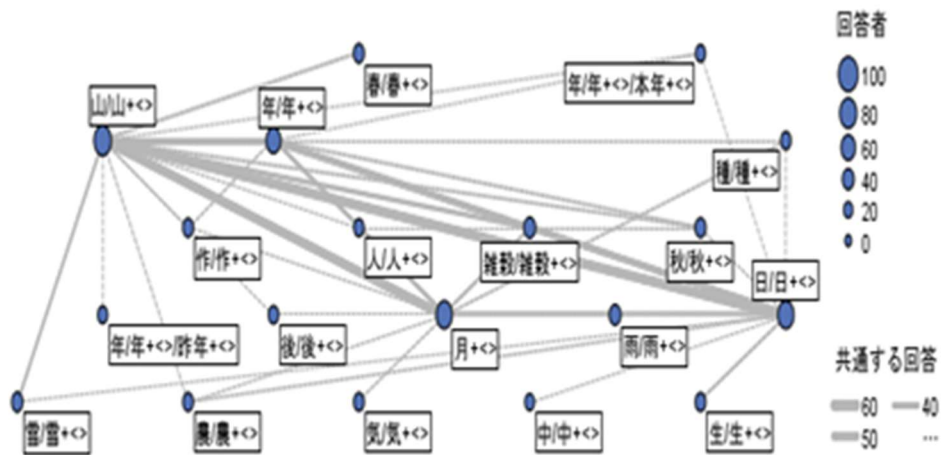
図 2. 感性分析の視覚化、カテゴリ農



感性分析：種、グリッドレイアウト 20-48

8

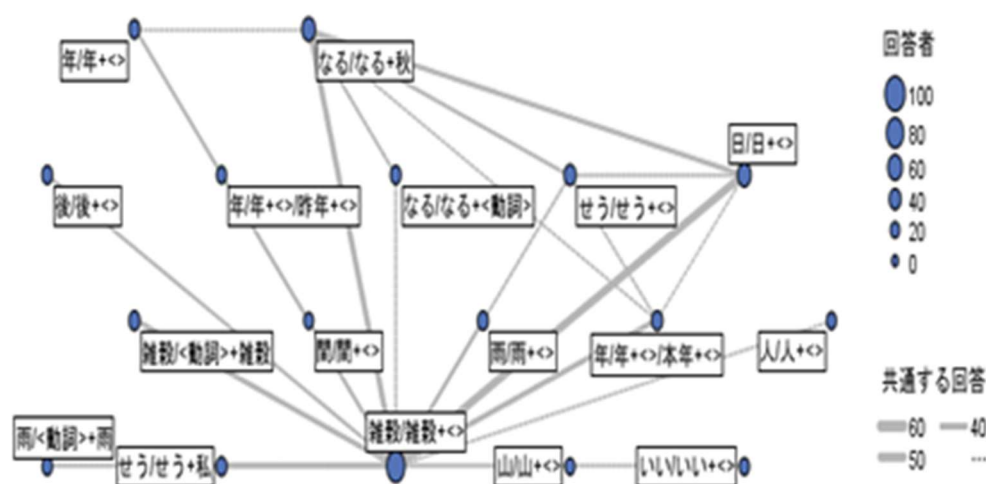
図 3. 感性分析の視覚化、カテゴリ種（たね）



感性分析：山、グリッドレイアウト 20-56

12

図 4. 感性分析の視覚化、カテゴリ山



係り受け分析: 雑穀、グリッドレイアウト 23-51

14

図 5. 係り受け分析の視覚化、カテゴリ雑穀

2. 対談の録音記録

降矢静夫の暮らしから山村農の思想・哲学を学び、書物にする目的で計画的に対談を行い、磁気テープに録音した(表7、表8)。趣旨は降矢個人の見方、考え方を中心に、生のままの語りから、日本人の自然観・文化観の基底には山住の生活があるとの視点から、西原という関東山地の一山村の具体的な生活誌を、雑穀を中心に置いて、記録することである。対談は表7に示した書物の章立てに沿って行った。木俣<季人>の問いかけに降矢<農人>が応じている対談内容の中から、降矢の自然観、農耕、人生観にかかわる語りの一部分を次に抜粋する(付録)。良く録音されていたテープとほとんど聞き取れないテープもあり、これらのうち2本は録音の失敗か内容不明であった(表8)。この録音テープ(60分または90分)は1979年から1984年までの5年間に

10回の対談で20本(合計約25時間)であった。文章化には音声入力ドラゴンヴォイス J11 を工夫して使用してみたが、ほとんど適正な文章にならなかったため、録音テープを繰り返し聞きながら文章化した(文字数にして約20万字)。

個人情報に関わる部分を削除して、対談の全文を下記サイトに公開する。上記の書簡集もすでに公開しているが、一般的な聞き取り調査ではなく、インフォーマント自身が自ら書き記し、また、語っている記録には聞き取りする研究者の解釈の余地が入らないので、とても貴重である。
http://www.ppmusee.org/_userdata/furuyadialogue.pdf

大方は降矢<農人>と木俣<季人>の対談であったが、部分的にはこのゑ夫人も合いの手を入れてくださって、鼎談になっている箇所には<妻人>と記して区別する。

なお、10回目は小林央往とともに降矢を訪ね、小林が雑穀栽培について主に質問をしている。

しかしながら、私はこの頃から北海道やインド亜大陸など国内外でのフィールド調査や実験研究が忙しくなり、当時、この約束を果たすことはできなかった。これを見

かねた安孫子昭二が降矢静夫俳句集『雪虫』を企画して下さったので、降矢には当座これで寛恕をいただくことにした。その後、35年も過ぎて、現在やっと資料を整理し、約束に従いこの一文をまとめようとしている。

表7. 雑穀のむら一山村の自然と文化誌

序

第1章 むらの自然

1. 山(三頭山、楨寄山、権現山)
2. 峠(鶴峠、西原峠、笛吹峠、佐野峠、鞆口峠)
3. 川(鶴川、小菅川、阿寺沢川、尾名川)
4. 植物(作物、雑草、野草、林木)
5. 動物(キツネ、タヌキ、鳥、魚)
6. 畑、焼畑

第2章 むらの生業

1. 農業
2. 林業
3. 炭焼き
4. 運送
5. 最近の産業
6. 今後の産業、発展の方向

第3章 むらの生活

1. 食生活
2. 衣・住居
3. 交通(通勤、通学)
4. 隣村との交流
5. 買い物、旅行

第4章 むらの年間行事

1. 年間行事
2. 農耕儀礼
3. 社寺
4. 石碑
5. 他界観

第5章 むらの文化

1. 伝説
2. 芸術
3. 教育
4. 世相の変遷
5. 村の文化的位置

第6章 まとめ

1. 山住の自然観・文化観
2. 過去から明日へ

あとがき

表8. 対談記録音声テープ

対応項	番号	年月日	備考
1)	n 1	1979.1.23	上書きされ記録不明
	n 2	1979.7.26	原則として農人と季人の対談
	n 3	1979.7.26	
2)	n 4	1979.10.16	
	n 5	1979.10.16	
3)	n 6	1980.2.23	
	n 7	1980.2.23	
4)	n 8	1980.3.22	
	n 9	1980.3.22	
5)	n 10	1981.2.20	
	n 11	1981.2.20	
6)	n 12		紛失
	n 13	1981.3.10	
	n 14	1981.3.10	
	n 15	1981.3.10	
7)	n 16	1981.8.6	
	n 17	1981.8.6	
8)	n 18	1982.3.19	
	n 19	1982.3.19	農人、季人、妻人 鼎談
9)	n 20	1984.10.31	農人、季人、小林央往 鼎談
合計記録 約 2 5 時間			

3. 山村農人降矢静夫の世界

書簡集のテキスト分析で抽出された主要なカテゴリに関わる降矢<農人>の語りの部分を対談内容から抜粋し、次に要約して示した。これらの発言を書簡集の記述と合わせて、心の構造と機能の視点から（黍稷2020）解析し、農人降矢静夫の世界像を解釈してみたい。持続可能な発展目標 SDGs などと大仰に言うまでもなく、彼こそが現代の自給知足を実践し、私が願う素のままの美しい暮らしを体現していた。SDGsの免罪符を襟元に飾っているような、いわゆる知識人とは全く異なる世界観で人生を暮らした農人から、私たちは真の文明、生き物の文明に移行するための生活様式を学ぶことができる。

1) 自然

①西原の景観

農人が暮らしたのは山梨県北都留郡の旧西原村で、現在は上野原市西原となっている。旧西原村は、北は三頭山から槇寄山を経て、西原峠から笛吹峠あたりまでの尾根筋の南面に位置する。南は佐野峠から権現山に至る尾根筋の北面になる。この真ん中を鶴川が上野原に向かって流れている。飯尾から初戸まで12ほどの自然集落がある。農人は標高の高い下城に暮らしてきたが、ここは役場支所、農協、郵便局もあるので、旧西原村の中心地であったようだ。この旧西原村はおおよそ6 kmと9 kmの範囲（面積37.12 km²）の谷筋の底にある小さな盆地様の地形を呈している（木俣ら1978）。農人宅からは槇寄山が背後に、鶴川が南に流れ、その向こうは権現山に至る尾根筋ということになる。ここが彼の生活の場、環境世界であった。対談の中から、自然へのまなざしを取り出してみよう。農人は要約すると次のように言っている。

西原は現在、一番奥の地域になっているから、昔の百姓の形態が残っているのだろう。桧原村

の半分は西原に属していた。桐原への道は狭く馬が通れなかったようで、上野原とは往来が少なかった。むしろ檜原、五日市や大菩薩峠を越えて塩山と往来していた。西原の草分けは尾根伝いに入ってきた秩父系の人だったと思う。佐野峠を越えて七保や大月に出る大菩薩峠への道が一番古いと思う。

②自然観

農人は身近な自然に関心が強く、書簡にも俳句にも数多くの自然事象や動植物の名前が出てくる（表4）。生態的観察も鋭いながら、農耕に敵対する事物や害獣・害虫、雑草にすら暖かいまなざしが認められる。たとえば、次のように述べている。

西原に住んで、雑草でも、虫でも何でも、機会があれば名前を覚えるとか、習性を知るとか、心がけてきた。キツネはハニーバンタムをよく食べる。

ヤマメはたくさんいるが、イワナは深い谷の水量が多いところにいる。西原は水源まで1里、小菅や丹波山は3里はあるから、多摩川のほうに多くいる。

今のほうがマムシに噛まれる人が多いのは、警戒心が薄らいだからだろう。照ると虫が多い。

マツタケは一杯取れたがおいしくない。自然のシイタケのほうが香りがよく、おいしい。

モリアオガエルの保護、ミツバツツジはきれい。妙な時代になって、昔いた虫が少なくなり、変な害虫ばかりが多くなって。セミはクワ畑で幼虫になり、抜け殻が沢山あったのだが、最近は除草剤を多く使うから、抜け殻があんまりない。

自給自足するためには古い人たちのしきたりを100年、200年かけて、自省工夫してきた。普段から山菜を採って、おなかを痛めるから大量は食べない。もともと食べたのはフキ、ワラビ、ギボウシで、クサソテツ、コゴミ、アケビの芽は食べなかった。クズから葛根湯を作る。

アユは昔どんどん取れ、神奈川の相模湖周辺から鶴川を上がって売りに来た。今はダムができ遡上しなくなったので、上野原周辺でアユをたくさん獲る人が食べるくらいで、うるかは高

いから食べられない。

百姓育ちで、花はどうちゅうこともなかったが、やっぱり楽しみだ。しかし、あまりきれいな花は造花のような気がして、好きではない。道端の草花のほうがよっぽど好きだ。

高尾の大見晴らしの一番高いところが西原の人家がある標高で霜害が多い。初戸だけが450mで、晩霜の被害がない。山梨に住んでいて富士山が見えないということは、山陰ということで、百姓にとってはごく不都合だ。西原ではわしらがやらなければ百姓はお終いになる。長作の守重洋作はまあやっている。若い人は百姓はやらず、丈夫な老人がやっている。

山には67歳になって登るようになり、三頭山には元日に5~6回登った。数馬に行くときは西原峠から、笛吹に行くときは藤尾を経て大日峠から、さらに笛吹から人里、帰りは数馬からバスで人里、笛吹、藤尾で、西原に至る。大月には佐野峠を越えた。小菅の長作からは鶴峠を越えてきた。

2) 生業

農耕は、産業としての農業生産ではなく、国権力に課税される苦役ではなく、生きるための業、家族のための仕事としてあつてよい。本来、農耕は苦痛な仕事ではない。農奴のように強制される謂れはもうないので、楽しみに行えばよい。現代において、もちろん農業生産は人間の日々の暮らしにとって、実に最重要な産業である。しかし一方で、人間が生きものとしてさらに自然から乖離しないようにするためには農耕を含む生業はとても重要な営為である。日本の農林業の窮状を憂えるあまりにではあるが、徴兵ならぬ徴農という強要論を主張する人もいるが、私はこれを拒否する。

農耕は自ら家族の食を得る生業であり、根源的な生きるための営み、仕事である。従って、自立した暮らしで誇り高いことであり、自由で、楽しいことである。多くの日本人に捨てられた農耕は、今日ではもう生

き方であり、思想による生活でさえある。誤解や先入観の束縛を解いてほしい。農耕、生業は誇りであり、楽しみなのだ。農耕だけでなく、狩猟、採集、飼育、園耕も楽しんだらよい。生き物の文明を真の文明として移行するように、強要されない自由な好みにおいて、任意な勸農を進めたい。私は生業という自然権をこのように考えている。農人の意見はどうだろうか。次に抜粋してみよう。

①農耕

農人は、いろいろな種子を何でもかんでもよく作ってみた。西原はモチアワの栽培が多く、収量は少ないが味は良い。桐原はメシアワが沢山取れたところだった。アワは標高が低い日当たりが良いところのほうが取れる。シコクビエは標高の高いところのほうが案外取れる。イネやトウモロコシでもモチのほうが収量は少ない。ホモロコシはモチ性だが、ハウキモロコシ（コーリャン）はウルチ性で、後者は誰も食べない。寒さに強いライムギも作ったが、草丈が高く、製粉は粘りが強くおいしくなかった。

ヒエは苗を作って移植していたので、ヒエの雑草は生えなかった。ヒエには3種類ある。食料ヒエ（ではない）飼料ヒエはまずい。南京ヒエは背が低く、台風には強いが、種子がこぼれ、おいしくない。アワにはエノコログサみたいな葉草が多く生える。西原ではインノウと呼んでいる。アワを食べるのは群れスズメだ。田にはコナギが多く生えるようになった。アワ殻は家畜がよく食べる。アワは移植しない。

農人は焼畑経験がない。明治の中頃から大正時代に盛んであったようで、敗戦後しばらくは行われていた。焼畑は熟練がいる。下草を焼いて、1年目にソバ、2年目に小豆、大豆、サトイモは沢寄りで栽培した。

同じ作物でも、ミミズがいない、有機物が少ない、乾いた畑ではだめだ。桐原は西原と比べて、畑が広く、暖かく、日当たりが良い。したがって作物の栄養価が高く、雑穀栽培が多く、こうしたちょっとした差が長寿の原因になる。

家畜にはキビ殻は消化が悪いので与えなかった。キビの連作は7年たてば大丈夫。肥料を与えすぎると、いもち病になり下から枯れ、稔実しなくなる。移植栽培も可能で、生育期間も短い。キビは夏に播くと、75日で完全に取れる。春に播くと100日かかる。

オカボは穂が出る時期までは高温で雨が多い方がよい。西原では日が翳るところの畑なので、オカボの栽培は古くはない。水稻も作りにくい土地だ。夏の荒い雨で耕土が流れて、浅くなってしまう。このため、麦を主体に百姓をする。

イネとシコクビエは定植時期に大差がない。とてもよく似た作物だ。シコクビエは直播すると草丈が高く、穂が不ぞろいになるので、移植栽培が良い。直播栽培では、水稻でもシコクビエでも、何でも草丈が大きく、分けつが多く、遅く出た穂は実が入らない。

ライムギは昔作った。一番寒い畑でも越冬する。成熟が7月20日頃になる。殻が大きくなって厄介だから、畑の悪いところで作る。食料をうんと確保するのは百姓の腕だ。今までムギが取れなかったところで、ライムギを試験してみた。まずいにしろムギが取ればはるかに楽だ。

茶は見た目の良い日陰の大きい葉よりも、むしろ小さい葉のほうが風味がある。肥料やるより、地力で伸びた程度のお茶のほうが上品なお茶ができる。古木のほうがいい。お茶は好きだ。

9月半ばになると本当に日陰になってしまう。田は水の谷と言って日陰になる。西原では山ばかりで、耕地が狭く、食料ができることなく、5反百姓、5~6反は中農の面積であった。豊作貧乏など苦労しただけで、収穫もしないで腐らせるなどはかわいそうだ。

西原に雑穀が多く栽培されているのは、老人が百姓をやめて新しい仕事をするのができないからだ。跡を継ぐ人はおらず、若い世代はスギやヒノキを植えて山にしてしまった。

世界中、日本中、すぐにわかる時代になると、いいものが見つかれば2・3年うちに真似をして生産過剰になってしまう。

②植林

林業は道ができたので、今のほうが盛ん。スギは馬の背にのせて、五日市へ運んだ。最近ではチェーンソーで下刈りをする。広大な面積の分収林がある。人件費も苗代も高い。

炭焼きは大正時代から盛んで、西原では200戸ほどが行っていた。神奈川からも入山して炭を焼いた。土地があっても、山ではとても収入が下りてこない、農家経営のようにはいかない。何百町歩あっても、木が育たないところもある。個人の山は人件費が高いので、ほとんど伐採がない。

③養蚕

養蚕も副業としてかなり盛んであった。昔は土地の繭は八分がたを糸にして売っていた。しかし、儲からないので、別の家庭内職がはやり、養蚕はお終いになった。西原の糸は染めて節句の人形の髪の毛にした。糸が平らできれいなもののできないので、高級織物にならないからだ。しかし最近はそのような節が出るものを手織り製品とすれば、あるいはかなりの価格になるかもしれない。

④雑穀の種子交換

農人の要望により、季人は国内外で収集した種子を提供した。農人は試作し、評価したうえで、請われれば多くの方々に種子を分譲してきた。生物文化多様性の保全を現場、農耕地で実践してきたと言える。望ましい、本質的な民族植物学の実行者であった。

南信濃の人がシコクビエの種子を探しに来た(1978年)。1月は昨年桐原の長寿村を編集の記者達が健康医学誌の方が来宅、私の話を聞にきました。3月号に玄米雑穀を見直すの特集号のための如くでした。自分でも雑穀を試作したい由、3種類ほど分譲した(1990.3.2)。丹波山や小菅村の人にもシコクビエの種子を分けた。先年、小菅・丹波山・奥多摩へはシコクビエの種を特志家には所望された。本年も私の縁者が依頼されたとの事で、シコクビエ、ヒエを西原の生家へ依頼が有り分譲した。相手の氏名は知

らないし、結果も不明だ。昨年は農協職員達の依頼で猿橋農協へ細々シコクビエの説明を付して分譲した。作ったか不明で職員に一度尋ねたが誠実なしで不明。自分で私の処へ来る人は結果報告が有り、人によれば秋収穫した穂を持参する。こんなことは毎年ある（2002.9.9）。

僅ですが雑穀の種を保持に今も微力を尽くして是非誰でもよく保持を願いたい。今回もヒエとシコクビエの保持のため栽培を見て戴き嬉しく思う。本年は小菅村の特志家所望して分譲、但し以前、丹波山、小菅、奥多摩に分譲したが現在種切れたかは不明である。本年は西原の特産品並に野菜の速売の組合員より予約があった。このグループは退職した元気な人の集まりの組合で、5年の経過である由で、今やヒエの精白が人気の様子だ（2002.10.11）。

ゼンブは弘法大師の伝説がありながら絶えてしまった。西原でもあったと思うが、探したが見つからなかった。高村光太郎先生が岩手で栽培していた人間用のヒエを石井先生からもらった。

昔のジャガイモは疫病か何かでなくなった。今は自家採種ではなく、北海道か八ヶ岳の種薯を買っている。木曽からもらったトウモロコシはモチ性であったが、直ぐにウルチ性と混ざってしまう。もとは甲州トウモロコシの系統ですが、混ざってしまって、トウモロコシほど変化が速いものはないです。でも、何回か良い種子を分けてやった。

3) 生活（食生活）

農人夫妻はすでに高齢であり、身体的には衰えてきているが、自立した生活を営んでいる。インスタント食品やレトルト食品などは用いずに、自家栽培の穀物や野菜を自給し、大方自足する食生活をしている。伝統食を大事にしながら、個人の嗜好に従い、また、野生植物や伝統食材を用いた料理を試食している。

ヒエは皮が二重で加工調整に手間がかかるから、少ししか作っていなかった。

弱いから大事にするので健康の元、ふらふらしている体だけど、百姓に無理すると、わしなんか奇跡だ。わしみたいな収入で生活している人はいない。最高生活、金を出してわしの生活はできない。そういう考え方にならないと、夢を持ってもどうにもならない。兼業農家でほかの収入が主だ。5反の畑から得た収入で賄っていかなくてはならない。

西原では自給自足だったから、食べ物は丁寧な食べ、凶作に備えて蓄えていた。明治期になって、食料が少ないときは神奈川あたりからアワを買って食べていた。それで西原では、買って食べるものを相模の穀という。戦前、神奈川の水の不便な所ではアワやオカボを大量に栽培していた。

食べ物はその人の好き好きだ。桐原では雑穀を多めに食べていたことが、長寿の原因だと思う。西原と比べて、隣村の桐原は畑の傾斜が緩く、日当たりも良いので、労働が楽である。今は米（イネ）を食べて、長寿村は返上している。若い人は白米、肉・魚、インスタント食品を多目にとるようになった。親戚のおばあさん（桐原94歳）は野菜物ばかり食べていた。丹波山村のいとし（97歳）は四足獣を短命になると言って食べなかった。

栽培量が少なくても、味が好ければ、現在でも食べているはずで、食べにくい、味が悪いものから栽培をやめていく。日本人は粘るものが好きだ。モチアワは食べるが、メシアワは嫌いだ。自家栽培のアワはよく食べたが、買うことはなかった。西原では水田は少なかったから、アワをうんと買って食べた。キビの香りが嫌だと言う人も、アワのほうが良いと言う人もいる。人間ていうやつはいろいろだ。古い人はオオムギをよく食べた。おバクをそれほどおいしくなくても、食べたい。子供の頃からオオムギに白米を少し混ぜて食べてきたので、それほどおいしいとは思わないが、飽きない。それが人間の習性だ。年を取ると濃厚なものはだめで、野菜がいいんだか、大量には食べないが、加工食品は好きません。

日本のコムギは最高だ。ほうとうは季節の野菜を入れて、味噌で作り、ねっとりしていて満腹になる。お米三食は良くないので、夜はほうとうを食べる。昔の物ばかり食べてね。今のはあんまり食べたくない。若い人はみな軟らかいものばかり、濃厚な食事は好まない。雑穀が健康に良くて、イネが余る時代に作る人はなくなる。食糧事情が悪い時代が来ればまた復活するかもしれない。雑穀は加工が面倒で、これも栽培が減る要因だ。大量生産している土地は良いだろうが、小規模な農業は立ち行かなくなるので、日本としてはえらいことになるだろう。

4) 信仰

農人はどちらかと言えば、アニミストなのだろうか。次のように話している。

西原は山だから、高い山に神がいる、仏がいると感じていると思う。お盆でも正月でも高い山からなんでも来るように迎えていた。山の神は各家で祀っていた。団子や筒酒を供えた。大正月には門松、小正月にはヌルデで門男、アボ、ヘボ、鎌や鋤を作る。座敷にはヤマボウシに繭玉を模した団子をさして、ダンゴバラを飾る。奥山は今では道が荒れ、草木が生い茂って、遠くまで行かないと、アボ、ヒボを作るヌルデはない。門男は自分の家で味噌を作るときに、燃やしてしまう。木が爆ぜるので、魔よけに使うと考えている。

わしは無信心だ。仏教は古事記の神話みたいな面、架空がうんとある。宗教家は、仏教が盛んになっても実態が伴わない。悟りは年をとってのあきらめだ。神様のことに對して、西原はもともと伊勢系ではなく、諏訪や出雲の神を信じていた。あんまり伊勢系のお参りばかりしていたら、先祖の神様が腹を立てるのではないかと。今、素直な気持ちで、出雲や諏訪神社のほうに崇拜しなければならない。神仏習合の際に、朝廷の神様に祭神を切り替えてしまった。恐らく、日本の信仰は、特殊な人は別として、そんなものだから、新興宗教が非常に増えたのではない

か。創価学会、立正佼成会でもこてこてに議論したので、わしのところには誰も来なくなった。母ちゃんは、あれ信者だ。

<妻人>おじいちゃんがなくなるときにね、佼成会でね来て呉れた。佼成会に入らないと、おじいちゃんが死んでしまうというんですね。そうしたら入ってね。あの22日、佼成会の生まれた日かね。縁日でね、それに行かなきゃ行行ったです。4時のバスで帰ったら、もうおじいちゃん死んじゃってね、もう本当にね、お他所の人が沢山来ていてね。私はどうしていいかわからなかったね。その時は、一番終いッ子がまだね、一歳ちょっとだった。

旅行は天理教が一番安い。旅行に行っても景色は見ない。花見に行っても、花は見ないで、酒を飲んだ話ばかりでおかしい。わしの肩書は農人だ。宮城に行ってみたら、御用商人や工事の車ばかりで、建物も洋館めいたものが多い。東御苑がいい。世の中どこを見てもあんまり変わらなくなっちゃった。明治神宮のうっそうと茂った樹林にはびっくりした。神社庁の主催で年に3~4回、150人くらいの見学の催事がある。歌舞伎は見たことがないので行って見て、満足した。

5) 文芸

農人を訪問する文人は少なからずいた。彼の作品は俳句に凝集されている。500句に及ぶ句集『雪虫』(1998) およびこの増補改訂版『降矢静夫俳句集、躑躅やしお』(安孫子編 2021) を参照していただきたい。また、知友への書簡は数が多く、季人あて(約300通)については本論で分析したが、安孫子昭二あて書簡(約500通)はいずれ公開される予定である。晴耕雨読こそ農人の趣味であり、俳句と書簡が主な表現手段であった。農人は次のように話している。

今は句をあまり作らない。わしも退屈しない性格で、幸福だ。俳句は体が忙しくてもできる。暇があっても神経に触ることがあるとだめだ。俳句にしろ文にしろ、結局は自分に見せるもの

で、そのつもりでやればできる。演説だって、人に聞かせるということではなく、自分自身に言い聞かせるのが演説だ。

色紙をもらったが、俳句では字の配置バランスが取れないので、漢詩を試みた。漢詩の専門家の説明を受け、無鉄砲に一応作ってみた。

酒を飲まないから晩酌の時間が空白だ。わしの晩酌は頭の運動で、好きな本を読んだり、何か書いたりすることだ。若い頃、暗いところで読書をし過ぎて近眼になってしまった。今みたいに本はたやすく手に入らなかった。秋になると、神田の古本屋に本を買いに行こうと思ったが1回も行かなかった。今は割合本は買えるので、八王子駅のそばの熊沢書店まで、年1回本を探しに行った。

西原は北都留の山陰だから、鶴陰と呼ぶことにした。西原のサイはいくつかの当て字があるので、サイの意味は賽の神を祀ったところかと思ったが、根拠はない。桐原にはユズがあったからか、柚と書かないのか、古い時代には漢字は読みに重点があって、後に意味を考えるとわからなくなる。

6) 人生

①人生観

農人の西原での日々の山里暮らしについて次のように来し方行く末を率直に語っている。

わしらは村単位ですからね。どこを中心にやっているのかさっぱりわからない。めちゃくちゃで收拾がつかない。基本線がないとやっている人が自分で困ることになる。自分自身の責任のある自由だったら、行き過ぎにはならないけれど、ただいっただけ言って考えなければ、收拾がつかなくなる。わしらあまりしゃべらないで、笑っているだけで、皆が良ければよかろうと言うくらいだ。しょうがない、それ以上言えないから。大変な世の中だから、変な交際費がかかるが、一族が長く住んでいるので、助け合って田舎は暮らしていける。百姓しながら西原に住んで、留守居だから、あとの者に継ぐくらいは

務めだ。

人間は楽に暮らせるところにだんだん集まってくる。人が集まれば生活状態がなんとか食える。西原は暮らしが悪いから人がいなくなる。たまに来るといいとこだと言う人がいても、やっぱり暮らすには大変だ。この頃、贅沢になった、それだけ文化があらゆるところで上がったというか、日本中どこも特色がだんだん同じになってきたということだ。

儲からないことばかりやって、貧乏して、だからわしは根性を出して、自分は人の厄介にならないという気持ちで、笑われようがどうしようが、鎌を担いで生きてきた。勤め人になって、人に言われて働くのもつまらない。わしは腹が立つと遠慮会釈なく、誰にもかみつく。人の機嫌を損じても、自分に損はないからね。

生活が周囲に比べて開けて行かない厳しい陸の孤島で、現金収入に変えられる仕事が急に増えてくれば、雑穀ももっと早く姿を消した。それが遅れただけだ。今日、西原で百姓して生きている、ばかばかしいことと皆感じている時代に、この2~3年間に急になってしまった。百姓やっても、疲れだけが取り柄で、一銭にもならない日が何日も続く。わしらは自分で食べるものを自分で作って、なるべく金を使わないで、食べていく、ほかに方法がないからそうしている。

②戦争体験

農人は西原から外出することは少なく、せいぜい近隣都県に盆栽の視察や観光にまれに出かけたに過ぎない。彼にとって、人生における大旅行は第2次世界大戦時に、海軍航空隊整備兵として徴兵され時のみであった。1943年10月に横須賀で海軍航空隊入隊、父島から硫黄島に移り、1944年10月に栄養失調で内地送還、横須賀および湯河原の病院で療養後、大分の航空隊に配属、敗戦で除隊し、原子爆弾被弾後の広島、京都、さらに東京を経て西原に帰るまでの大遠征であった。

硫黄島は西原より狭い面積(23.73 km²)の

火山島で、現在は東京都小笠原村に属している。東京区部から南海上 1,200 kmにある。第2次世界大戦時には、日本とアメリカの激戦地となり、日本軍戦死 20,129 人、アメリカ軍戦死 6,821 人、戦傷 21,865 人であった。最高点は摺鉢山 (169m)、土壌は火山灰で保水性はなく、飲料水などは塩分の多い井戸水か雨水に依拠していた。戦前は 1,000 人ほどが居住し、硫黄採掘やサトウキビ、コカ、レモングラスなどの栽培、漁業などをしていたという (Wikipedia.org/wiki/硫黄島、硫黄島の戦い)。次のように農人は戦時でも百姓の視点で事象を観察してきた。

農人は百姓だから、島民に聞くと、サツマイモが主で、サトウキビ、コカイン、パイナップルを栽培していた。穀物ではイネ (米) は内地から移送し、キビとアワは栽培していたが主食ではなく、楽しみに食べる程度であったという。農人は滑走路づくりに従事していたが、胃腸が弱かったので、栄養失調になって 1944 年 10 月に内地送還になった。横須賀の海軍病院から湯河原の病院に 1945 年 2 月までいた。同年 2 月 19 日に硫黄島はアメリカ海兵隊の強襲を受けて、3 月 17 日には硫黄島の日本軍は玉砕した。何もかも、大本営発表と逆であった。農人は病弱ゆえに硫黄島での戦死を免れた。さらに、大分の航空隊では飛行機もなかったの、農耕班を編成して田植えをしていたという。敵機が来ても硫黄島で経験しているのでへっちゃらだった。しかし、広島島の爆弾はびくびくだったが、それからわずかにして終戦になった。

海軍の兵士は狭い艦船に乗るので、一人一芸ではなく、いろいろな技術を習得せねばならず、10~15 人力の精兵になるには数年の訓練が必要である。農人のような病弱な丙種徴兵の促成では役には立たない。むしろ、うちに残しておいて百姓させておいた方が、一人前に働き食料増産の役に立った。敗戦後の状況は凄まじく殺気立っていて、平時のような同情心は少なく、戦病の人さえも病院を出されたら、だれも同情せず、かわいそうだった。

7) 教育と学習

受験教育による学校教育歴と自己学習による自由学問歴とは全く異なった内容にある。高校生の時に、NHK テレビ名古屋で討論会 {中学生日記の試行番組} に出たことがある。その時の話題は、ソニー創業者の井深大の学歴無用論だったと思う。この頃から学歴とは何だろうかと考えてきた。東京学芸大学に 40 年間勤務して、同僚教授や学生たちの振る舞いを見てきて、もちろん立派な研究者や学生も多数いたが、それでも学歴は教養を担保しているのだろうか疑問に思うようになった。そこで、教養とは何だろうかと考え始めた。私は、教養とは思い遣りであると理解するに至った。さらに、世俗で苦勞するうちに、学校教育歴と教養とは必ずしもそれほど高い相関はないのではないか。教養とは第7感良心である (スタウト 2005) と知ったからには、なおさらそう思えるようになった (黍稷 2020)。

私は小学生の頃から学校の先生に反発してきた。高校生の時にも受験教育が嫌いで、優等生ではなく、受験エリートにはなりもしなかった。したがって、学校教育歴よりも自由学問歴の方を重んじてきた。学校を選ぶのではなく、自ら尊師を選び、私的に師事して学んできた。生きた師匠もあれば、歴史的な著作の中で私淑した尊師もある。学問の自由とは、自ら好みの学問の師を選ぶところから発すると思う。

①侍の修養

農人には教育に関して一家言がある。興味深い事例は隣家の降矢敬雄参議院議員のおばあさんのことである。

侍の娘で、19 歳ころに九州から東京に嫁に来た。御殿奉公に行って行儀見習いをして、裁縫、漢学、和歌、またある程度の武芸百般ができる。侍はこの教育を厳しくやった。こうした修養によって侍は侍になる。土百姓と卑下されるが、修養すれば結果は侍と同じになる。人間は苦勞しないとだめで、今はみんな平等だから、自分

で自分のことを教育しないとだめだ。今の子供は際立って理屈は達者だが、みんな楽をして金をうんととるという気風で、根気がない。

親となり、子になるには先祖からの責任がある。それを自覚して変なことはしてはいけない。若いうちは、事変から、戦争、戦後とね、日本で一番厳しい時代だったから、子供なんかただ食べさせるだけで、大事にしてやれない。小さいうちは怖いから親の言うことを聞くが、大きくなると親なんかに負けない気になる。親に似ないつもりで生きて行こうと思うが、親に似てくるものだ。親は正しい行動をしていないと、子供はよく見ている。

子を育てるのは大変だ。親がちゃんとした生活をしていないと、いくら子供ばかりを叱っても、人間が出来上がるものではない。親の素行を見て真似る。自分が黙って勉強していれば、そういう家の子供はどこかで見ていて親の真似をし、引きずられ、家風のようにごく自然に勉強することがそんなに負担がない。失敗してもあきらめない。人間としての根性、自尊心を持つことが大事だ。伝統や先祖を大事に誇りに思うことだ。日本人は誇りを持っていない人のほうが多い。アメリカ化しすぎた。いろんな分野でなんでも（アメリカの）真似が多い。

②学歴

受験教育への対案として考えるのは、学校教育履歴ではなく、個人学習履歴の重要性である。最近、総合的な学習の評価方法に用いるポートフォリオは、学習活動において作成された作文、レポート、作品、テスト、活動の成果物をファイルに入れて保存することである。受験教育で試験の成績を評価するよりも、日々の学習成果である作品でこそ、達成度は認識でき、さらなる発達につながる。農人は次のように言っている。

学校教育は基本で、本当の勉強は就職し、所帯を持ってからすることだ。最近は教育ブームでどこでも教育熱心だけど、何か欠けている。教育はうんと受けているが結果的には大した

ことはない。時代が進んでいるのか、なんだか分からないが、煎じ詰めると楽しんでうんと金をとるとのことだ。人生せつかく生まれたからには何かやってみなければ惜しい。目標にした価値のために取り組んでやり抜く。自力で災難を乗り越え、更生する力があつたが、今の制度ではよほど心がけの良い人は別として、あまりに他力本願で、救ってもらおう、輪をかけて取ってやろう、人間の欲望に限りはない。実際は金にならないことをやっている方が楽しいはずだ。

今年（1980）、小学校の生徒が6人になった。農人の頃は70人いた。六藤分校は閉鎖することになった。田舎に来たって、百姓なんかあんまりやらなくて、子供も休みにする仕事は何もない。わしも年寄りだから、子供が遊んでいたから全くおかしいと思う。昔の教育では、子供に働け、働けと言う教育だったです。丈夫であつたら、バカでも何でもまじめに働けば食べていける、生きていける。しかし、今ではそんな理屈は通らない。働きすぎると生産過剰で、戦争を勃発させるようになってしまう。人間はあまり利口でないので、一度歩き始めたら、止められないですから。震災でも来るとえらいことになる、悪いとわかっている、それを大丈夫として、手が付けられなくなる。

私は小学校だけしか行かないので、孫の中学の地図をかりてアフリカやインド、中央アジアの国々の名を覚えたくて80才を越して勉強です。おかしいでせうね。大学どころか、中学は出なかったなあ。おれ、小学校だけでは、今になって矢張り旧制中学程度の学が侮られます。小学卒業後只農一筋に生きてきましたが、山村の農の手造り農人の時代逆行してきた宿命は侘しい（1999.7.8）。

8) 社会

私たちも日本大学の人たちが民家を借りていると聞き及んだので、西原調査のために民家が借りられないか探してみたが、1980年頃には借家などとても見つからなか

った。このころまでに、特段親しかった明峯哲夫が国立や日野では飽き足らず、藤野から上野原へと畑地を探していた。彼は有畜農業を実践してきて、さらに都市を耕すという理念を提唱していた。私の紹介だったと思うが、明峰は農業実践の場を探して、農人を頻繁に訪ねるようになっていた。時の理論家であった彼がその後どうしたのか音沙汰がなくなり、知らなかったが、インターネット検索をしてみたところ、2014年に病気で亡くなっていた。遺稿著作集の年譜によれば、1981年5月に都市内での耕作をより重層的に充実させるため、近郊の山間地に親農場を構想し、土地探しを続けたが、実現せず、と記されている(明峯2016)。農人は要約すると次のように考えていた。

山村での自給自足は今では難しい。自給肥料ではできないので、金肥を使うようになって病害虫が多くなった。農業そのものは投げ出した時代に来た。農外収入がなければ、百姓だけ真剣にやることはできない。ひっそりと田舎で暮らすのは一つの憧れのようなもので、田舎で半年や一年住んでも嫌になり、土地で好きに何をやるというてもうまくいかな。それはねえ、生活が緩やかになってね、半分遊びを兼ねた百姓でこれをやるなら、長年勤めて年金をそろそろもらうようになって、生活の保障を得て、大切だからといって、西原で百姓やるのなら成り立つだろう。どうやったって引き合う物じゃない、今は時代がそんなに甘くない。農人は具体的に述べている。5反だけでは暮らせない。

普通に生活すること自体が貴く、人間として政治家だけが貴いわけではない。西原は老人ばかりになる。老人はやることがないので、退屈して話は愚痴ばかりになる。過去を楽しまないで、将来を楽しんで、そのほうが元気があっていいんです。

4. まとめ

私の短い人生でも、犬に三度噛まれ、自動車にはねられ、ラグビーで失神し、不注

意で自転車で転倒し顔面を、書架で指を負傷、働き過ぎで腰痛、何かと満身創痍である。しかし、これらの身体的傷はなんとかおおよそ癒えた。実際は、職業上の人間関係で少なからずの裏切りに合い、むしろ満心創痍、心的外傷後ストレスを、時には思い出すので、囚われているに違いない。私は山村が好きで、山村のために、私的な名利と無縁に働いてきた。したがって、繰り返しムラ社会に撥撫されてきたことを公表したくはなかった。だが、余生も残り少なくなり、この世に恨みを残さないために、事実を記録、解析しておくことにした。不快な思いを解析するだけでは、心の平衡が保てず、鬱陶しいので、個別の三部作として、第一論考で希望のある誠実な農人を紹介、次に第二論考でムラ撥撫の事例を比較、さらに第三論考で公正な理論的論証を加えることにした。

この国では、基礎研究の仕事においてさえも、すべてが商業主義に取り込まれ、剽窃や換骨奪胎が少なからず横行している。最初に苦労して創作したことが尊敬されないで、要領よく二番煎じに真似たものが商品となる。あるいは、舶来翻訳ものが持て囃され、独自に創作されたものは関心を持たれない。残念なことに、これは明治維新の文明開化以来、日本の学界やマスコミ界の変わらない歴史的慣習である。この結果、学問の独創的成果が評価、蓄積されてこなかった。何にしても、この国では毎日椅子にしがみついていると、席を失い、消し去られてしまう。学問内容の高さや深さで尊敬を受けるのではなく、椅子の大きさで名利が保持されるので、このために老人は若者に席を譲らない。自分より能力が低いものを仲間を選ぶのは、保身ゆえであり、これでは良いチームができず、後継者も育たない。日本の大学の学問水準は衰退するばかりだ。

これらのことはいわゆる市井人、門外漢

の農人も指摘しているところで、農人の直観力と教養の高さを窺い知ることができる。心の構造と機能に関しては木俣（2019）や黍稷（2020）で論考したので次に要約する。そこで、この仮設に依拠して、書簡のテキスト分析と対談の内容から農人の心の構造と機能の解析を試みた。

心の構造における一般的知能は、ピアジェの見解に従えば、学習及び意志決定についての汎用の規則によって構成されている。基本的特徴はどの行動領域であり、経験されたことに照らし合わせて行動を修正するために用いられる。学習と問題解決のための包括的な規則群。博物的知能（直観的生物学）は自然界の理解、動物、植物についての思考。居住地域についての地理学。社会的知能（直観的心理学）は他の個々人とやりとりする心を読む。個人間の社会関係を調整する。社会的な相互作用、社会的柔軟性の能力。技術的知能（直観的物理学）は道具を作り、操る。環境から資源を取り出し利用する。言語知能は感情や情報を伝達する（ミズン 1996）。

ミズンの論考に加えて、現代都市民における心の構造を考察してきた（木俣 2019）。さらに、超克を進めるために、心の構造における一般知能の認知流動性が心の機能を高め、心の統合をもたらす可能性について考察の端緒を得ようと試みた。そこで、心の構造はその機能と一体的に作能することを考えてみたい。

心の構造の諸知能はミズンの見解によれば狩猟採集民において統合されていたが、次第に、集住する都市国が成立し、その権力支配が強まるにしたがって、諸知能の領域は再び分断されるように向かった。具体的には、小集団における自治的な社会的知能は国社会の制度に依存するようになった。その後、諸産業が発達し、18世紀半ばには産業革命が起こり、以来とりわけ現代では高度な科学技術による生産商品がブラック

ボックス化し、日常生活における技術的知能さえもほとんど無力無用になり、自然と乖離した都市的生活は五感の鍛錬を阻害し博物的知能を縮減し、言語知能は情報処理機器に代替し、これまた直接的な意思疎通を衰微へと導いている。広く普及した公共学校教育制度での画一教科分断は全体的な認知流動する一般知能を发育させない。さらに、現代人の心の構造の主要部は代替言語知能としての情報機器で、これは効率的なアルゴリズムではあるが、非効率的な良心はそこには組み込まれ得ない。

心の機能を支える五感（視・聴覚、味・嗅覚、触覚）は美を感じ、第六感（直感・直観）は真を観ぬき、第七感（良心・教養）は善を行う。すべては天性（生物の遺伝子ジーン、gene）のみならず、師友を求め選び、自律した学習（文化の自己複製子ミーム meme）によって、粗野・野蛮から洗練・文明の品性を鍛え磨くのだ。素のままの美しい暮らしは自然と文化の粋であって、自然が粗野、文明が洗練と固定的偏見してはおらず、むしろ現代文明が粗野で野蛮な状態にあるのではないのかを問いたほしい（スタウト 2005、木俣 2019、黍稷 2020）。

農人は自然に接して暮らしているので、博物的知能は当然ながら高い（表 4）。社会的知能は狭い生活環境世界に暮らしていながら、交友が広く（表 6、図 4）、他地域、海外の世界にも関心があるので、高く維持されている。地域社会では適切な距離をもって交際を保っている。技術的知能、特に農耕については研究的に実践している（表 5、図 1～3、図 5）。言語知能は俳句で鍛えている。一般知能の認知流動性や直観も鋭く鍛えられている。これらのことはテキスト分析から明確になった（表 1～3）。

すなわち統合的な心の構造が健全に築かれていると、僭越ながら言える。年老いて体も衰えて、目を患い、それでも晴耕雨読の暮らしで、自然の中で、五感（視・聴覚、

味・嗅覚、触覚)は美を感じ、俳句を作り、書簡をしたためる中で、第六感(直感・直観)は真を観ぬき、自ら読書し、学び、さらに多くの訪問者、交友者から学び、思索し、第七感(良心・教養)を豊かにしている。素のままの美しい暮らしを実践する農人である。ミズンが現代の狩猟採集民に認めた統合された心の構造に匹敵するほどの心の構造に加えて、豊かな機能が農人に認められると、師に対して僭越ながら考えるに至った。

注: テキスト分析の用語説明 (IBM. SPSS/Text Analytics for Surveys, ver. 4.0.1, Japanese);

テキスト分析とは、テキストを対象とする分析手法で、テキストから有用な情報を抽出して、本質的な情報を少ない個数のカテゴリで表現する定性分析である。日本語で実行できるのは感性分析および係り受け分析である。

感性分析は感性とみなされる表現(主に述部)を抽出し、その感性の示す主題が出力される。係り受け分析は係る語と受ける語の関係性が出力される。

(1) カテゴリ(コード); テキスト分析の最終結果。

(2) ディスクリプタ; 文書の要約や文書中の重要な語句などを指す。キーワードとも呼ぶ。

(3) レコード数; データベース内のテーブルを構成する単位のひとつで、一行分のデータを指す。

(4) コンセプト(キーワード、語彙); テキスト内の意味語。

(5) タイプ; コンセプトをグルーピングするための文法的、あるいは意味識別子で、コンセプトが少なくとも1個含まれている。品詞タイプと感性タイプがある。なお、感性タイプには肯定的<良い>、否定的<

悪い>、およびその他<その他>がある。さらにそれぞれ、細かいタイプに分かれ、合計82種類がある。

(6) パターン; コンセプトとタイプを組み合わせたもの。コンセプトパターン(識別子)はコンセプト+<タイプ>、タイプパターンは<タイプ>+<タイプ>になる。

(7) カテゴリの視覚化; 複数のカテゴリ間で共有されている回答の個数に関する情報を表示する。グラフの各ノードは1つのカテゴリを示す。

謝辞

本論の対談相手の降矢静夫さんに親しくお付き合いいただき感謝します。本来なら共著の書物にして30年前に世に出すべきでしたので、かなわなかったことをお詫びします。御奥様降矢このゑさんにはお茶や昼食をご配慮いただき、御礼申し上げます。研究者人生を始めた頃で、たくさん励ましてくださり、とてもありがたかったです。安孫子昭二さんには後になって『雪虫』を編集して下さり、降矢さんもととても喜ばれて、とりあえず、私は気が楽になりました。今日まで、彼には何かと励ましていただきとても感謝しています。畏友小林往央さんは西原にも2、3度訪問して下さり、鼎談(1984)の記録によって久しぶりに声が聞けてうれしかったです。この10年後に、彼はアフリカ、マリの調査でマラリアにかかり、帰国後急逝(1994)しました。降矢さんは2003年に他界され、今、私は2021年のCOVID19大流行の只中に何とか生きています。皆さんとの親交の記録をここに残して置きます。

関連文献

木俣美樹男・熊谷留美・佐々木典子・武井富士子・中込卓男 1978、雑穀のむら 特に雑穀の栽培と調理について、季刊人類学第9

巻第4号：69-102。

木俣美樹男・横山節雄 1982、雑穀のむら 特
に雑穀の栽培・調理の残存分布およびその
要因について、季刊人類学 第13巻第2号：
182-205。

降矢さんを囲む会編 1998、雪虫、降矢静
夫 俳句集甲武境の村・西原に生きて。

木俣美樹男 2019、日本雑穀のむら、第3章
関東地方の雑穀文化複合、第4章関東山地
中部地域の雑穀文化複合

[www.milletimplic.net/milletsworld/millet
etsn/jnpmilvil.html](http://www.milletimplic.net/milletsworld/milletsn/jnpmilvil.html)

黍稷農季人 2020、素原の超個人主義、
www.milletimplic.net/essey/

文福洞先斗 2021、ムラ社会における心の構
造と機能の事例分析、民族植物学ノオト14：
76-115。

黍稷農季人 2021、孤独と孤立～ムラ社会の
撥撫に抗う心の構造と機能、
www.ppmusee.org/goods.html/pdf

引用文献

安孫子昭二編 2021、降矢静夫俳句集『躑躅
やしお』、民族植物学ノオト 14：9-39。
<http://>

明峯哲夫 2016、生命を紡ぐ農の技術、コモ
ンズ、東京。

ミズン(S. Mithen) 1996、松浦俊輔・牧野美佐
緒訳 1998、心の先史時代、青土社、東京。
The Prehistory of The Mind.

スタウト(M. Stout) 2005、木村博江訳 2012、
良心をもたない人たち、草思社、東京。

参考文献

日本アイ・ビー・エム株式会社、操作コー
ス、Text Analytics for Surveys 3.0